(1985.12.21)

内水試 かわら版 72号

ワカサギ卵の人工ふ化について

霞ヶ浦産の、ワカサギ親魚を利用しての人工ふ化は、昭和五十八年から始まったが、来年は北浦でも行うことになりました。

この湖内産ワカサギ親魚を用いての人工ふ化事業では、採卵からふ化までの歩留りが、湖内自然産卵の歩留りよりも良くなければ、効果は期待できないことになります。

内水試では、五十八年、五十九年と、霞ヶ浦で行われた、湖内産ワカサギ親魚を利用した人工ふ化を調査した結果、次のような事に注意する必要があることが判りました。

(1) 残卵について

採卵は、腹部を指でしごいて行うのですが、この場合絞り方によっては、卵が残ることがあります。五十八年では、平均約30%の卵が腹腔内に残っていました。しかし、五十九年には改善され、平均で約10%になりました。採卵は出来るだけ無駄のないように行う必要があります。

(2) ふ化用水について

ふ化用水の濁りは、卵への附着物量を増加させふ化率を悪くするので、湖水、池水より地下水が良い。水温は10℃前後が適温で、20℃以上の水は使用すべきではありません。

(3) ふ化池の管理について

水温が低く、小さい卵とはいえ、酸素が必要です。ふ化池に収容されたふ化枠は、僅かな隙間で互いにビッシリとくっついて収容されています。従って、幾ら広い池に収容し、他の水域で酸素量が十分あっても、卵の周囲の水が動かなければ(酸素が供給されなければ)卵は酸欠で死ぬことになります。

これを防ぐためには、卵の周囲の水を動かしてやれば良い訳ですから、エアーレーションの設備があれば理想的です。

なお、池への注入水量ですが、10分間で15ℓのバケツ一杯の水量で、150組(10枚一組)のふ化枠収容が目安です。

(4) 卵の管理

ワカサギ卵は、長期間にわたって、太陽の直射を受けると、ふ化率に影響が出るので、遮光のために、シート等で覆いをする必要があります。

また、水生菌に犯されますので、定期的にマラカイトグリーンで卵消毒を行わなければ、卵の歩留りは悪くなります。

茨内水試図

行方郡玉造町甲 茨城県内水面水産試験場 (02995-5-0324)